

大草谷津田いきものの里 自然観察会

バッタとジャンプ

木下順次 (千葉市)

日 時：2011年10月16日(日) 10時30分～12時00分

参加者： 大人12名 子ども5名 天候：晴れ

担当指導員： 田井中信子・木下順次



前日から降り続く雨が朝には止んだものの、大草の常で田の畔におりると泥でぐちゃぐちゃで足下に不安の残る一日でした。開始時間ぎりぎりまで参加者の姿がなく「もしかして参加者ゼロ!？」と心配しましたが、直前に数家族が集ってくれました。大草はリピーターの方がとても多いのですが、この日は初めて参加の男の子たちもやってきてくれました(何としてもこの子たちもリピーターにしなくては!)。いつも通り、大草谷津田いきものの里と観察会の趣旨説明を行いました。このところ毎回のようには参加者・担当者ともに緊張させるキロスズメバチがこの日も直前の下見で何度も見かけていたので特にハチに対する注意を具体的に説明しました。

今回は、すぐに谷津田におりるのではなく、まずは駐車場の草地で観察をしました。参加者に透明のプラカップと紙パックで作ったふたを配り、自由にバッタを捕まえてもらいました。その後、ひろげたシートの上でみんなが採集したものを集めて仲間分けしました。ショウリョウバッタ…10、オンブバッタ…3、ヒナバッタ…2、ツチイナゴの幼虫…2、クビキリギス…1 などなど。

バッタ類とキリギリス類の違いを解説したり、ショウリョウバッタ、オンブバッタの違いを子どもたちと観察したりしました。当地では見られないトノサマバッタや大型の緑色ショウリョウバッタを田井中さんが事前に採集してくれていましたので、こちらもじっくり観察です。事前に採取しておいた♀のトノサマバッタは、ペットボトルで作ったケースに入れておいたら土中に産卵できないので仕方なく(?)裸で産卵してしまっていました。本来は土の中にうみつけられるはずの泡(もう固くなっていたが)に包まれた茶色の卵塊がはっきりとみられました(普段見られないものが見られたのはよいのですが、少しかわいそうでもありました…)。

谷津田の休耕地に生息する種との違いを確認するために、いつもの観察路をおりて次の観察スポットへ。途中、めじろんば から湧水までの観察路には無数のトビナナフシの死骸が…。目が慣れてくると一帯には本当に多くの死骸があるのです。一斉に寿命が来たのか、何らかの病気が発生したのか、原因は分かりませんが、少なくとも昨年の同時期にも同じ光景が見られたとのことなので、大草の生態系のサイクルとして、何かあるのかもしれない。

駐車場の草地と比較するための観察地は湧水脇の畦とその奥まった所。畦を歩くとびに足元からピョンピョンとバッタが飛び出しますが、こちらではコバネイナゴを中心に、オンブバッタ、ショウリョウバッタ、コオロギ類などが観察できました。途中オケラを捕まえました。自身でもずいぶん久しぶりです。初めて見る方もいて、前肢の独特な形態にずいぶん感心されていました。カマキリの産卵、バッタの交尾、ナガコガネグモ(バッタをぐるぐるまいている)、各種マイマイ…。テーマはバッタですが、多くの目を持って観察すると様々なモノが見えてきます。バッタの耳とコオロギの耳(腹や肢にある!)、バッタとキリギリスの触角の違い、イナゴのドチンコ(?)等ルーペを使って一人一人じっくりと見てもらい、最後はイナゴとバッタはどちらが泳ぎ上手かを皆で観察しました。コバネイナゴは上手に泳ぎ、オンブバッタは泳げないとなるはずだったのですが、担当者の力量不足であまり上手に水に放り込むことができずうまく違いを見てもらうことができませんでした(事前に試したときは明確に差が出たのに、本番ではどちらも溺れかけていたような…)。

最後の最後に反省すべき出来事がありました。帰路スズメバチに遭遇し、ここで参加者のお父さんがプチパニック。ハチを振り払おうとする動きを抑えることができませんでした。大事には至りませんでした。こうしたリスクへの対応は、何度でも訓練をする必要があると思いました。